

アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

要覧 1986



研究部門構成

研究部	研究部門 (開設年度)	研究分野または対象とする言語文化
一般	言語文化第Ⅰ (1964年度)	一般言語学理論・文法記述理論・語彙記述理論・コンピュータ言語学・一般音声学理論・音素論・音声実験理論など
	言語文化第Ⅱ (1967年度)	民族学・歴史学・地理学など
	言語文化第Ⅲ (外国人客員研究部門) (1979年度)	言語・文化, 民族学, 歴史学, 地理学等の分野における, 特に現地人研究者又は現地研究の欧米専門家との共同研究による地域研究法の開発
東アジア	東北アジア (1966年度)	朝鮮語・ツングース語(満洲語・その他のツングース語)・極北諸語(チュクチ語・ユカギル語・ギリヤーク語・アイヌ語など)および文化
	中国第Ⅰ (1968年度)	中国諸方言(北京語・呉語・福建語・広東語・客家語など)および文化
	中国第Ⅱ (1979年度)	チベット語(現代チベット語・チベット文語など)・イ語(口語語)・チュワン語・回族の諸言語などおよび文化
北および中央アジア	モンゴル・シベリア (1982年度)	モンゴル諸語(ハルハ方言・ブリヤード方言等)・カルムイク語・モンゴル語・ダグール語・モゴール語および文化
	トルコ・ウラル (1971年度)	チュルク諸語(トルコ語・オスマン語・ウイグル語・ウズベク語・タタール語・チュヴァシ語・ヤクート語など), ウラル諸語(フィンランド語・エストニア語・ハンガリー語・サモエド諸語など)および文化
東南アジア	インドシナ第Ⅰ (1964年度)	ベトナム語・タイ語・ラオス語などおよび文化
	インドシナ第Ⅱ (1969年度)	ビルマ諸語・モン語・カンボジア語などおよび文化
	インドネシア・オセアニア (1967年度)	インドネシア語(マライ語)・ジャバ語・タガログ語・ピサヤ語・マラガシ語・メラネシア諸語・ポリネシア諸語・パプア諸語などおよび文化
南アジア	インド第Ⅰ (1965年度)	ヒンディー語・ウルドゥー語・ベンガル語・マラーティー語・クジャラーティー語・シンハリ語・サンスクリット語・パーリ語などおよび文化
	インド第Ⅱ (1978年度)	ドラヴィダ諸語(タミル語・テルグ語・カンナダ語・マラヤラム語)・ムンダ諸語および文化
西アジア	イラン (1972年度)	ペルシア語・クルド語・バルーチ語・パシュトー語・アルメニア語・グルジア語などおよび文化
	アラビア (1966年度)	イラク方言・シリア方言・エジプト方言・マグレブ方言・アラビア文語・ヘブライ語(現代ヘブライ語・旧約ヘブライ語)・アラム語・アムハラ語などおよび文化
アフリカ	アフリカ (1964年度)	ハウサ語・フラ語・チュイ語・ヨルバ語・イボ語・メンデ語・マンディング語・スワヒリ語・リンガラ語・ファン語・ズル語・ホサ語・ソト語・ショナ語・ルアンダ語・ガンダ語・アフリカーンス語・ガラ語・ソマリ語・ベルベル語などおよび文化

目 次			
概 要		言語研修	15
歴史と性格	1	海外学術調査	16
組 織	2	助手等の現地投入	17
職 員	4	外国人研究員	18
研究活動		施 設	
共同プロジェクト	6	電算機室	20
共同研究員(公募)	12	図書室	21
研究生	14	音声学実験室	22
言語情報機械処理	14	出版物一覧	23

概 要

歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究、これらの地域における諸言語の辞典編纂、および教育訓練を行うことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語、およびそれを通じて、これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため、言語研修を実施すること。

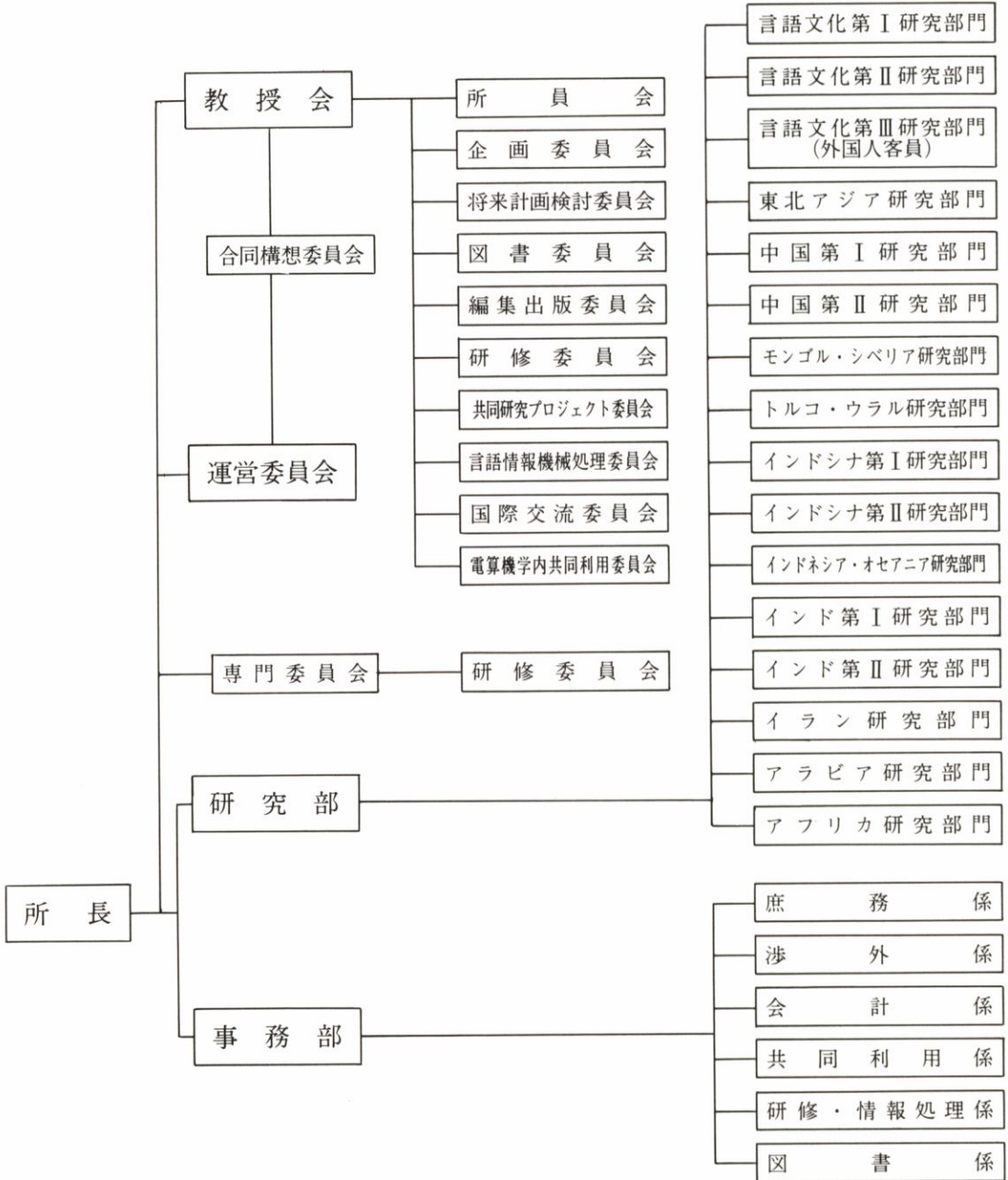
以上の三点が本研究所の主要な目的です。

* * *

共同利用研究所は、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し、相互の接触や交換の機会をつくり、それによって研究の発展・進歩を促すことを目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964年4月1日に、東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来、整備拡充が進み、今日では16部門の研究所に成長しました。

組 織



(1986年5月1日現在)

区 分	教 授	助 教 授	講 師	助 手	その他の職員	計
定 員	(2) 15	15	0	9	30	(2) 69
現 員	(2) 12	14	0	10	30	(2) 66

() は外国人客員数を外数で示す

運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に答えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第11期(1985. 2～1987. 1)の運営委員は現在以下の通りです。

荒松雄	津田塾大学教授 (東京大学名誉教授)	中根千枝	東京大学教授
池田修	大阪外国語大学教授	中村平次	所員
石川栄吉	東京都立大学教授	西田龍雄	京都大学教授
伊東徹	東北大学教授	林榮一	大阪外国語大学学長
井上和子	津田塾大学教授	本田實信	名古屋商科大学教授 (京都大学名誉教授)
大江孝男	所員	三根谷徹	国学院大学教授 (東京大学名誉教授)
小澤重男	東京外国語大学教授	護雅夫	日本大学教授 (東京大学名誉教授)
黒柳恒男	東京外国語大学教授	矢内原勝	慶応義塾大学教授
佐々木高明	国立民族学博物館教授	山口昌男	所員
柴田武	元東京大学教授	山田信夫	京都女子大学教授 (大阪大学名誉教授)
祖父江孝男	放送大学教授	渡部忠世	京都大学教授
谷泰	京都大学教授		
田町常夫	福岡工業大学教授 (九州大学名誉教授)		

専門委員会

また、所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1986年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

相浦臯(大阪外国語大学教授)、池上二良(札幌大学教授、北海道大学名誉教授)、池田修、大東百合子(津田塾大学学長)、小澤重男、北村甫(麗沢大学教授、東京外国語大学名誉教授)、黒柳恒男、柴田武、柴田紀男(天理大学助教授)、西田龍雄、半田一郎(東京外国語大学教授)、松山納(国際大学教授、東京外国語大学名誉教授)

職 員

所長 (併) 梅 田 博 之

研 究 部 (五十音順)

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| 教授 飯 島 茂：異文化の接触 | 助教授 池 端 雪 浦：フィリピン史 |
| 教授 梅 田 博 之：朝鮮語 | 助教授 石 井 溥：南アジアの人類学 |
| 教授 大 江 孝 男：朝鮮語 | 助教授 加賀谷 良 平：音響音声学, アフリカ諸言語 |
| 教授 岡 田 英 弘：東アジア史 | 助教授 上 岡 弘 二：イラン語 |
| 教授 川 田 順 造：西アフリカ文化 | 助教授 辻 伸 久：中国語および中国の諸言語 |
| 教授 坂 本 恭 章：オーストロアジア諸語 | 助教授 内 藤 雅 雄：インド近代史 |
| 教授 中 村 平 次：インド現代史 | 助教授 中 嶋 幹 起：中国語 |
| 教授 奈 良 毅：インド・アールア諸語 | 助教授 中 野 暁 雄：アフロ・アジア語 |
| 教授 橋 本 萬太郎：シナ・チベット諸語 | 助教授 永 田 雄 三：トルコ史 |
| 教授 原 忠 彦：イスラム教徒社会 | 助教授 松 下 周 二：アフリカの言語 |
| 教授 日 野 舜 也：アフリカ都市社会の比較研究 | 助教授 森 幹 男：インドシナ比較文化史 |
| 教授 山 口 昌 男：文化記号論 | 助教授 守 野 庸 雄：日本語・スワヒリ語対照研究 |
| | 助教授 家 島 彦 一：イスラム社会経済史 |
| | 助教授 湯 川 恭 敏：理論言語学, バントゥ諸語 |
| | 助 手 梶 茂 樹：バントゥ諸語 |
| | 助 手 新 谷 忠 彦：言語哲学 |
| | 助 手 高知尾 仁：象徴論 |
| | 助 手 中 澤 新 一：チベット仏教の人類学的研究 |
| | 助 手 中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史 |
| | 助 手 羽 田 亨 一：イラン史 |
| | 助 手 林 徹：トルコ語 |
| | 助 手 松 村 一 登：フィン・ウゴル諸語 |
| | 助 手 水 島 司：南インド近・現代史 |
| | 助 手 宮 崎 恒 二：インドネシアの諸社会 |



中部ネパールのカリガンダキ下流にかかるつり橋。
女性の背のカゴはドコ (doko) と呼ばれ、逆円錐形で、
ループ状の巾広のベルト一本を額にかけて背負う。
(石井 溥)

事務部

事務長 山本唯雄
文部事務官
事務長補佐 渡邊仁
文部事務官

庶務係

係長 石橋徳三郎
文部事務官
庶務主任 井上由美子
文部事務官
文部事務官 (タイピスト) 谷川かつ子
文部事務官 藤井貞人
文部技官 (自動車運転手) 塙和雄

会計係

係長 平井栄治
文部事務官
文部事務官 乙訓寛雅
文部事務官 (移転推進事務室を兼任) 山木宏明
文部事務官 藤崎英朗
文部事務官 佐伯季之
用務員 植田カツエ

研修・情報処理係

係長 浅見義則
文部事務官
文部事務官 岡田ほなみ
文部事務官 中嶋弘子
文部技官 今井健二

渉外係

係長 田川恵二
文部事務官
渉外主任 佐久間敬喜
文部事務官
文部事務官 神田環

共同利用係

係長 名倉武二郎
文部事務官
文部事務官 金井京子
文部事務官 津田貞子
文部事務官 大村和子
文部事務官 佐々木毅

図書係

係長 石川恵子
文部事務官
文部事務官 中川陽子
文部事務官 鈴木喜久子
文部事務官 須郷知子
文部事務官 粟瀬篤司



ネパール、カトマンズ盆地のネワールの村で
雨期の頃何日かおきに行われるラケ(Lakhe
一悪魔)の仮面踊り。祖先をまつるガイ・ジ
ヤトラ(Gai Jatra)の日には通りで車に金を
せびり、もらうまで通さない。(石井 博)

研 究 活 動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行うとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1986年度のプロジェクトは研究の研究計画と共同研究員は以下の通りです。

なお()内は研究代表者です。

言語研修 (大江孝男) 所員 17名

本年度は、引続いて下記の事業及び研究活動を実施し、本研究所の「言語研修」に関する諸問題を検討すると共に、日本語との対照研究を通じて対象言語の特徴を把握し研修の方法改善に役立てる。検討すべき問題は、①研修のあり方 ②実施言語の選定と実施計画の検討 ③研修実施の方法(テキストとカリキュラムの構成、指導・訓練の方法、評価の方法、視聴覚教材の導入と利用の方法) ④研修自動化に関する研究と実験、等である。実施する事業と研究活動は次の通り。

1. 次の3言語の研修を実施する。

(東京会場)：西南官話(中国語)、タミル語 (大阪会場)：ベンガル語

2. 専門委員会2回、研修実施の成果報告検討会(専門委員・共同研究合同会議)1回

3. 研修実施言語の教材作成並びに研究連絡のための会議、(東京、大阪)

4. 電算機補助プログラム開発研究班の研究会

大坪一夫	太田 斎	徳永宗雄	マリニ・スプラニアン
吉川武時	喜多山幸子	頓宮 勝	
今井敬子	家本太郎	溝上富夫	

辞典編纂プロジェクト (橋本萬太郎) 所員 4名

アジア・アフリカの諸言語の語彙資料を蒐集、機械処理し、それに音韻論的、辞学的、形態論的、統辞論的分析を施し、これらの言語の辞典の編纂にそなえる。

石沢良昭	鶴殿倫次	落合守和	川本邦衛
伊東照司	遠藤由里子	金子真也	神田信夫
今井敬子	太田 斎	辛島 昇	慶谷壽信

佐々木 猛	辻本春彦	福田権一	峰岸真琴
佐藤 昭	富平美波	星 実千代	クリスティン・ラマール
鈴木和子	仲田浩三	松村 潤	
高田時雄	花登正宏	松村文芳	
高橋 保	吹抜悠子	三上直光	

アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究 (永田雄三)
所員 8名

イスラム世界の諸地域および諸生活類型を基層文化の側面から研究する。

昭和59年度に第一回の調査を実施した海外学術調査「アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の比較調査」によって得られたデータを、本プロジェクトの研究会のなかで検討してゆく。

『日本とトルコにおける「近代化」の比較研究—お雇い外国人を中心に—』分科会を発足の予定。

新井政美	私市正年	高橋忠久	浜畑祐子
石沢良昭	小西正捷	竹下政孝	松原正毅
岩見 隆	小堀 巖	田村愛理	丸山 純
岡田恵美子	後藤 明	柘植洋一	三木 亘
片倉素子	佐藤次高	津野幸人	宮治美江子
禿 仁志	塩尻和子	鶴見良行	山形孝夫
鴨沢 巖	清水宏祐	富岡倍雄	山本太平
川床睦夫	鈴木 董	新妻仁一	渡辺金一
北川誠一	鈴木 均	内藤正典	モハマド・ナギザデ

南アジアの大河流域における農村社会の研究 (原 忠彦) 所員 5名

本年はバングラデシュの2次に亘る現地調査の全体総括の年に当り、原・谷口・白田・海津・佐藤(哲)・岩永及び第1次バングラデシュ調査に参加した荻口を含め、全体報告書の作成に当る。また、他の成員は、第1次・2次タミル調査の分析を通して、バングラデシュとの比較の視点を明らかにし、一般理論構成の準備を行なう。

岩永正明	河合明宣	佐藤 宏	中村尚司
白田雅之	桐生 稔	谷口晋吉	柳沢 悠
海津正倫	小西正捷	徳永宗雄	荻口善美
辛島 昇	佐藤哲夫	中里成章	

ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究 (石井 溥)
所員 2名

昭和50～51年には、文部省科学研究費(海外調査)により、「中国・インド文明接

触地帯における自然、生態と文化に関する調査」をおこなった。その後も、両文明の接触過程が典型的に観察することのできるヒマラヤ・チベットに焦点をあてて、言語、文化、社会に関する総合研究をおこない、昭和55年度、57年度、59年度にはネパールに科研（海外調査）で「ネパールにおける国民形成の人類学的・言語学的調査」を実施した。

本年度はこれらの一連の調査研究にもとづき、本プロジェクトの今後の問題点や研究課題を検討する。

立川武蔵

長野泰彦

アフリカにおける都市化の比較研究（日野舜也） 所員 10名

このプロジェクトは、アフリカ大陸全域において、普遍的に進行している都市化の現象をとりあげ、国民社会の形成、都市社会の構造、地域社会の形成と都市・村落関係の展開、諸部族社会の社会関係、地域共通語の機能などとの関連において共同研究をおこなうことによって、従来、諸研究者の個人的レベルで集積されてきた研究成果を組織化し、総合的な比較研究をおこなうことを目的にしている。

今年度は、科学研究費による現地調査（予備調査）を行うにあたり、数回の研究会をつうじて研究方法についての基本的合意をはかり、対象地域についての具体的検討およびアフリカ都市研究関係の文献リスト作成などを行う。

赤阪 賢

小川 了

端 信行

宮治美江子

阿久津昌三

小倉充夫

原口武彦

米山俊直

上田 将

嶋田義仁

福井勝義

和崎春日

江口一久

富川盛道

前山 隆

和崎洋一

大森元吉

富永智津子

松園萬亀雄

和田正平

岡崎 彰

中村孚美

松田素二

渡部重行

象徴と世界観の比較研究（山口昌男） 所員 4名

アジア・アフリカおよびアメリカの土着社会の説話・神話・儀礼を特に時間・空間観念との関連において研究し、この方面における比較研究および民族学・神話学および歴史学的分野間の方法論的接合点を探る。

浅田 彰

小川 了

中村雄二郎

宮田 登

阿部年晴

大室幹雄

西村 康

村山道宣

網野善彦

落合一泰

野田正彰

山下晋司

石井 進

小松和彦

野村雅一

横井 清

市川 浩

清水昭俊

松岡心平

渡辺公三

上野千鶴子

坪井洋文

松園萬亀雄

大隅和雄

長島信弘

宮坂敬造

内陸アジア史文字資料の研究 (岡田英弘) 所員 2名

内陸アジアの諸民族の歴史の現地語資料による研究は、過去20年間に急速に発達し、それぞれの専門の研究者が輩出しているが、内陸アジア史全体としての構成は、今後の課題として残されている。この点に鑑み、満洲語、モンゴル語、トルコ語、チベット語、ペルシア語、アラビア語等内陸アジア史の資料となるべき文献に通じた歴史学者・言語学者を集めて共同研究プロジェクトを組織し、個々の直接の専門地域を超えた全体的史観の樹立に資するため、年3回程度の会合を開いて、それぞれの領域における文字資料のあり方を討論し、その成果を集録して、一般研究者のためのマニュアルを作成する。

石橋崇雄	小山皓一郎	浜田正美	宮脇淳子
梅村 担	後藤 明	細谷良夫	森川哲雄
河内良弘	佐口 透	本田實信	山口瑞鳳
北川誠一	清水宏祐	松村 潤	吉田順一
栗林 均	志茂碩敏	間野英二	樋口康一

東南アジアの自主的思考：その構造と歴史的展開 (池端雪浦) 所員 3名

本プロジェクトでは、東南アジアの了解構造、知の体系、社会諸制度、生活慣行などにみられる自主的思考を、その構造と歴史的展開過程の二側面から明らかにしたい。自主的思考の考察には、土着文化の構造をもつばら問題にする方向と、土着文化と大文明（あるいは外部世界）との相互作用を問題にする方向とがある。本プロジェクトでは、その二つの方向を考察視野におき、かつ、共時的研究と通時的研究の接点を深めてゆきたい。

石井米雄	清水 展	寺田勇文	新田栄治
石沢良昭	白石昌也	富沢寿勇	宮本 勝
奥平龍二	関本照夫	永積 昭	
鍵谷明子	高谷紀夫	中原道子	
斉藤照子	土屋健治	中村光男	

アジア・アフリカ諸言語の比較・対照研究 (奈良 毅) 所員 17名

「アジア・アフリカ諸言語の研究」(昭和56年度—60年度の共同研究プロジェクト)の成果として作成された「文法調査表」および「語彙調査表(改訂版)」を使い、アジア・アフリカ諸言語のいくつかを実際に調査し、音韻・文法・語彙の構造や体系について比較ないし対照研究を行う。

本年度は、音韻部会、文法部会、語彙部会を開き、それぞれの研究報告を行い、成果は年報にのせて発表する。

伊豆山敦子	上野善道	小田真弘	坂本比奈子
岩田 礼	大島 稔	金 東俊	崎山 理
内田紀彦	奥平龍二	近藤達夫	柴田紀男

柴谷方良	土田 滋	早田輝洋	藪 司郎
下宮忠雄	角田太作	原 誠	山田幸宏
杉田 洋	津曲敏郎	溝上富夫	吉川 守
杉藤美代子	中島 久	三谷恭之	アミール・モハバッド
高階美行	長 弘毅	宮岡伯人	カリヤン・ダスダプタ
田村すず子	繩田鉄男	村崎恭子	チャールズ・モリスン・デウルフ
塚本明廣	橋本 勝	森口恒一	ツイオン・ベン・シムエル

南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成 (奈良 毅) 所員 3名

南アジアで話されるインド・アリア諸語、ドラヴィダ諸語、オーストロ・アジア諸語、チベット・ビルマ諸語の共時的・通時的研究を行い、それらの辞典編纂や言語研修に役立つ基礎言語資料としてのデータベースを作成する。

10年計画の初年度(61年度)は、研究会等を通じて上記諸言語のうちベンガル語・ヒンディー語・パンジャブ語(インド・アリア系)、タミル語・カンナダ語・テルグ語(ドラヴィダ系)、サンタル語・ムンダリ語・カスイ語(オーストロ・アジア系)、ガロ語・マニプリ語(チベット・ビルマ系)等に関する研究情報(研究者・研究書・辞書・文献資料等の情報)と基礎語彙を収集し、電算機に入力する。

内田紀彦	三上直光	溝上富夫	藪 司郎
坂田貞二			

第三世界と日本—現状と展望— (中村平治) 所員 2名

この共同研究はテーマの示す通り、今日の第三世界と日本の相互関係を特に最近の局面に関心を集中して究明し、その問題点を明らかにしようとする。以下にその特徴点を共同研究作業を進めるにあたり指摘しておく。

第一に、現代日本研究者の参加を得て、日本の現状認識を深める上で、その国際的な諸契機の所在の確認が要請されていると考える。その為に、政治・経済・思想の諸分野を包括する。

第二に、東アジアから中東に及ぶ諸研究の問題関心を整理し、これら諸地域と日本との史的な関連と問題点を摘出する。この他、欧米・西欧・ソ連研究者も加わりグローバルな視角から、主題の解明を試みるものとする。

第三に、本研究は文字通りインター・ディシプリナリーなアプローチを志向しており、主題に関する討論と討論成果の面で、相互に益するところもまた少なくないと考えている。

第四に、本研究プロジェクトは3年間に及ぶ計画であるが、各年度末に研究成果を出すのではなく、最終年度に成果刊行を考慮している。

金子 勝	木村英亮	佐藤栄一	毛里和子
神田文人	桐山 昇	西田美昭	吉田光男
木畑洋一	古賀正則	丸山直起	

「未開」概念の再検討 (川田順造) 所員 3名

「未開」の概念は、「文明」との対比で、民族学・文化人類学にとって基本的な重要性をもってきたが、その概念の形成された文化的、思想的背景、内容、研究概念としての有効性等については、十分な検討がなされてきたとはいえない。この共同研究では、

- 1) 文化史的発展段階としての「未開」と、思考構造上の「異世界」としての「未開」
- 2) 技術の文化と価値の文化の関係
- 3) 日本をはじめとするアジアおよびヨーロッパ文化も対象とすること、等を重視しながら、学際的に研究をすすめたい。最低3年間は継続する予定で、研究成果は逐次刊行する。

阿部謹也	嶋田義仁	徳丸吉彦	古橋信孝
阿部年晴	陣内秀信	中村雄祐	堀内 勝
安溪遊地	住谷一彦	二宮宏之	宮田 登
大貫良夫	竹沢尚一郎	野村純一	安丸良夫
大林太良	谷 泰	野村雅一	山本吉左右
小松和彦	田村善次郎	船曳建夫	渡辺公三
坂部 恵			

南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究 (内藤雅雄)

所員 4名

本研究は、多言語・多民族・多宗教の複合社会と規定されてきた南アジア諸国において、諸々の形態の社会・政治運動が展開される場合、個々の次元の運動参加者がいかなる契機でその組織や集団に加わっていったかを検討することを通じて、時代時代の民族意識のあり方と、彼等が参加する運動や組織・集団の実体をより精密に把握しようとするものである。1) 対象としては、20世紀初頭から現在に至るまでの南アジア諸国での民族運動・労働運動・農民運動とその組織、およびその他の社会運動や社会集団の形成過程を各担当者が考察する。2) その際、カースト・宗教・言語などの諸要因が個人生活に与える規制力がいかなる変化を経てきたか、またそれが個と組織・運動体を結ぶ契機として、いかなる役割を果たしたか、そこでのカースト・アソシエーションのようなものが果たす役割・機能などもとり上げられよう。4) また、運動という範疇には入らないが、時期と条件を異にして世界各地に移動していったインド人移民の各移住先でのアイデンティティー形成過程も重要な考察対象としてとり上げられる。

石田英明	渋谷利雄	鈴木正崇	柳沢 悠
佐藤 宏			

共同研究員 (公募)

1978年度より、共同研究プロジェクト(6ページ~11ページ)とは別に、当研究所において一定期間研究を行う共同研究員を公募しており、現在まで次の諸氏に委嘱しています。
なお()内は研究テーマです。

氏名	テーマ	氏名	テーマ
1978年度		1983年度	
小馬 徹	(スワヒリ語の構文と統語法の研究)	浜畑祐子	(イランの暦法と祭り)
四宮宏貴	(インド・パキスタン分離独立の史的研究)	松村文芳	(漢字の機械処理に関する調査研究)
平戸幹夫	(マレー農村社会におけるイスラム教)	宮坂敬造	(文化テキストとしてのことわざの比較分析)
村上泰子	(統辞論および音韻論の諸規則にいかん意味の介入がおこなわれているか?)	1984年度	
1979年度		加藤 栄	(現代ベトナムにおける《Tho' mòì》評価の新しい動向について)
遠藤保子	(未開民族における舞踊の機能と構造について)	吉田憲司	(アフリカ諸文化における色彩語彙ならびに色彩象徴に関する比較研究)
木田理文	(近代早期社会における民衆運動の人間観に関する比較研究)	Mohammad Naghizade	(The Agrarian Aspects of the Iranian Revolution—With Special Reference to the Rural Institutions and Farmers' Organization)
信森廣光	(現代マルタ語と北アフリカ諸言語における言語文化に関する総合研究)	堀川世津子	(イラン立憲革命におけるジャーナリズム)
福島邦夫	(民間説教者と言語芸術)	松原孝俊	(口頭伝承の比較研究)
宮脇淳子	(十七世紀のハルハモンゴル)	1985年度	
1980年度		阿久津昌三	(アフリカ学術調査「スーダン・サーヘル地帯の研究」)
堀川 徹	(中央アジアとイスラム 16~18世紀中央アジアのイクターについて)	大月隆寛	(東アジアにおけるFolk-lore研究の現状と課題 現代社会における伝統文化の変容の問題を中心として)
宮脇淳子	(15~17世紀の北アジア史研究)	喜山朝彦	(東アジアにおけるFolk-lore研究の現状と課題 現代社会における伝統文化の変容の問題を中心として)
山下晋司	(象徴と世界観に関する研究)	黒田 卓	(アジアの民族運動とその国際関係)
山本真鳥	(言語文化比較研究資料)	渋谷利雄	(アジアの民族運動とその国際関係)
1981年度		1985年度	
井谷鋼造	(オスマン・トルコ語史料の研究)	小野 浩	(イラン語、特に古代・中世のイラン諸語の研究)
内堀基光	(サラワク・イバン族の英雄民話圏における象徴と世界観)	佐々木明	(新大陸作物受容と南アジア農村)
川瀬豊子	(古代イランの社会構造に関する研究)	佐島 隆	(トルコを中心とした宗教的文化の構造と動態)
安元直子	(マレー伝統社会のリーダーシップ構造)	ト田隆嗣	(歌唱の伝承—マレーシア、ブナン社会からの問題提起)
1982年度		鈴木 均	(19世紀イランの民衆運動とジャーナリズム)
石上悦郎	(独立インドの国家建設と工業化計画の研究)	塚田誠之	(華南少数民族の歴史と文化—広東・広西の壮(Zhuang)族とその隣接諸族を中心に)
川崎有三	(潮州語の研究)	出口 顕	(神話とエスノヒストリー。中央~南部バントゥ社会の事例の分析)
高谷紀夫	(稲作文化の比較研究)	藤井文男	(歴史的統辞体系変化の類型学的考察)

氏 名 テ ー マ

1986年度

- 大石 周 (南インドの大河川(カウヴェリ=コルルン水系)の経済史)
- 喜多村正 (インドネシアにおける土着文化とイスラーム化)
- 駒井利江 (日本語とマレイ語の比較—マレイ語圏における初級日本語学習者の問題点を探る)
- 小林寧子 (インドネシアにおけるイスラム教教育の近代化—20世紀初頭のジャワ島を中心に—)

氏 名 テ ー マ

- 鳥居秋子 (日本における華僑の実態)
- 成家克徳 (東南アジアの農民運動と植民地秩序の比較研究)
- 水田正史 (ペルシア帝国銀行研究)
- 吉田 修 (インドの外交政策決定課程に見る世界システムと国益概念の関係)

研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。

研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

1986年度

氏 名	研 究 テ ー マ	指 導 教 官
高 橋 美 和	タイ地域研究(伝統的宗教生活を中心に)	坂 本 教 授
藤 縄 智 子	イランにおける殉教劇(タアジーエ)と民衆蜂起	上 岡 助 教 授
北 澤 義 之	エジプト革命と国際関係	中 村 教 授
後 藤 和 之	パレスチナ民族運動と第三世界	中 村 教 授



オマーン・スール港で建造中のダウ船 鋭く突き出した船首部は、ブーム型ダウの特徴。スール港は、オマーン・ダウの造船基地として知られ、平坦な砂浜のあちこちで50~60トン級のダウが造られている。

(家島彦一)



ティハーマ漁民の小供たち(北イエメン・ホディダ港で) 紅海に沿ったティハーマ地方(低地イエメン)には葦造りの円型家屋が多く見られ、住民の顔、服装などにも対岸のエチオピアやソマリアと酷似している。

(家島彦一)

言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語のデータを大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータについて一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論的情報を分析・形式化し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために、デーパナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングルなどの文字フォントを作製し実際に使用しています。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語などのデータが蓄積されつつあります。

言語データのプリント・アウト例 (上：ペルシア語、下：クメール語)

زاین آدم هائی که عیبه ساجسز بودند گدائی کند و اگر رقیب دیگری پیدا شود که او را بتازاند .	HED0SAG02304
املاً طلع ساجسز بکنم و مداره اثر را برادارم که اگر زنده ند ما را قتل عام نکند و جوامرات را نا	HED0SAG14301
رای سرگرمی سفول دروسن آن ند فکر سکود اگر زسز آنها بود این کار زنامه که هرگز ناسفته	HED0SAG25206
اگر زسز سابه اتوسبل بناه سیرد .	HED0SAG01314
این جمله را سر سنن حوسر فرار داده بود که : (اگر سنن زر است .	HED0SAG21706
بمشید اگر سؤالات بنده کل کننده است فقط از لحاظ کیم	HED0SAG24403
اگر نده منت دروز به دیک محتاج بکنم سمارسز	HED0SAG03802
اگر غیر از این بنانند چیز سنسک و بارور نکردنی -	HED0SAG14612
اطور سوسین تا شهر دو ساعت راه بود درسین راه اگر کسی به ما بر می خورد . کاتیا با من زرس	HED0SAG11609

កកល [kəkəl] (動) いざる。(席をつめるように)尻をずらす

កកថ [kəkəθ] → កកថ · កកថ

កកវ [kəkəv] (動) (コーヒー、スープを)何回も掻きまぜる(名) (スープの一)

កកប · កកប · កកប [kəkəp kəkəap] (副) ①(アヒルの歩く様子) ②(力をふりしぼって)ヨイシヨヨイシヨ

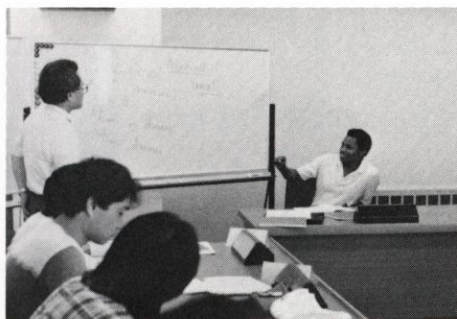
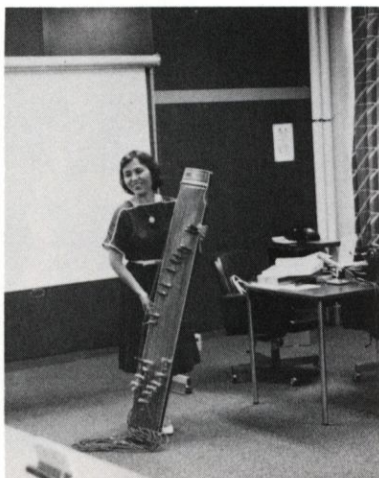
កកគ [kəkək] (動) (ネズミが)何回もかじる。(トウモロコシを食べる時のような食べ方で)食べる

កកក [kəkək] (動) 何回も指の爪で(注意を引くために)引っ掻く。(痒い時に掻くのは! វវ)

កកក · កកក [kəkək kəkək] (動) (子供が)片言をしゃべる

កកក · កកក [kəkək kəkək] (形) 大声でしゃべっていてうるさい

言語研修



上：スワヒリ語
左：朝鮮語

アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおこなわれていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からの6年間ほぼ毎年夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ1言語か2言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行うことになり、当研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者の協力をえて、東京（2言語）と大阪（1言語）で、初級コースを下記のとおり実施してきました。

研修言語名（修了者数）

東京会場

大阪会場

年度

1974	朝鮮語 (10), チベット語 (12)	
1975	カンボジア語 (8), ベンガル語 (12)	
1976	ペルシア語 (10), スワヒリ語 (9)	ビルマ語 (5)
1977	広東語 (14), マラーティー語 (6)	モンゴル語 (18)
1978	タイ語 (12), トルコ語 (12)	ペルシア語 (13)
1979	ハウサ語 (8), ビルマ語 (14)	タイ語 (7)
1980	ネパール語 (14), モンゴル語 (14)	ベトナム語 (5)
1981	ヒンディー語 (8), パシュトー語 (10)	中国語中級 (26)
1982	アラビア語 (12), ハンガリー語 (17)	フルフルデ語 (12)
1983	チベット語 (12), フィンランド語 (21)	パンジャブ語 (8)
1984	ピリピノ語(タガログ語) (12), ヨルバ語 (3)	トルコ語 (15)
1985	朝鮮語 (14), カンボジア語 (10)	スワヒリ語 (8)
1986	西南官話, タミル語	ベンガル語

研修生（各言語約10名）は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料、受講料を納付することになります。また、全課程を終えた人には修了証書が授与されます。

各コースの研修時間は1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間で実施しています。なお電算機補助による研修プログラム(CAI)の作成について現在具体的な研究と作業が進められています。

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。

なお()内は研究代表者です。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査
1969年, 1971年 (富川盛道), 1974年, 1976年 (日野舜也)
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査
1970年 (岡 正雄)
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動
1972年 (河部利夫)
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査
1974年, 1977年, 1980年 (三木 亘)
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然, 生態と文化に関する調査
1975年 (飯島 茂)
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究
1979年, 1981年, 1983年, 1985年 (原 忠彦)
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査
——ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究——
1980年, 1982年, 1984年 (北村 甫)
- (8) スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究
——ハウサ・フラニ語圏を中心に——
1981年, 1982年, 1984年 (富川盛道)
- (9) 環カリブ海地域における複合文化の比較研究
——アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程——
1982年, 1983年, 1985年 (山口昌男)
- (10) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究
1983年, 1984年 (三木 亘), 1986年 (上岡弘二)
- (11) バントゥ諸語の調査・分析と比較研究
1984年, 1985年 (湯川恭敏)
- (12) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤及び共生関係の文化人類学的研究
1986年 (川田順造)
- (13) アフリカにおける都市化の総合比較調査
1986年 (日野舜也)

助手等の現地投入



西域の民は舞踊好き。夜空に満天の星が輝く頃、ウイグルの男女のダンスはまさにたけなわ。手をかざし、爪立ちしてクルクルまわるその姿はまるで宙に舞うかのよう。異彩を放つこの踊りを中国では「胡旋舞」と呼んだ。1984年7月中国新疆ウイグル自治区カシュガルにて。(中嶋幹起)

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計20名が派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。

- 1967年—1969年 石垣幸雄 (エチオピア地区)、守野庸雄 (タンザニア地区)
1969年—1971年 松下周二 (ナイジェリア地区)、家島彦一 (アラブ連合地区)
1971年—1973年 内藤雅雄 (インド地区)、中野暁雄 (モロッコ地区)
1973年—1975年 福井勝義 (ソマリア地区)、中嶋幹起 (香港地区)
1975年—1977年 加賀谷良平 (ボツワナ地区)、湯川恭敏 (タンザニア、ザイール地区)
1977年—1979年 石井 溥 (ネパール地区)、藪 司郎 (ビルマ地区)
1979年—1981年 羽田亨一 (イラン、トルコ地区)、清水宏祐 (アラブ連合、イラン、トルコ地区)
1981年—1983年 山本勇次 (ネパール地区)、新谷忠彦 (ニューカレドニア地区)
1983年—1985年 辻 伸久 (中国、香港地区)、水島 司 (インド地区)
1985年—1987年 中見立夫 (中国、モンゴル地区)、梶 茂樹 (ザイール、ケニア、ザンビア地区)



香肉(犬肉)の屋台：中国広東省珠江三角州にて犬の肉を食用に供した記録は中国でもかなり古くまでさかのぼるそうだが、現在では広東地方を除いてあまり犬料理の話は聞かない。「羊頭狗肉」なる慣用語があるからには、やはり狗肉も珍しいものではなかったと想像する。広東人はこれを香肉と呼び、寒い冬に体を温める香肉シチューは広東料理の隠れた名菜である。写真の屋台にぶらさがっているのは、犬の丸焼き。チャーシュー(叉焼)や北京ダックのごとく、照りのある見事なきつね色に焼きあがっている。(辻 伸久)

外国人研究員

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れた外国人研究員は以下の通りです。

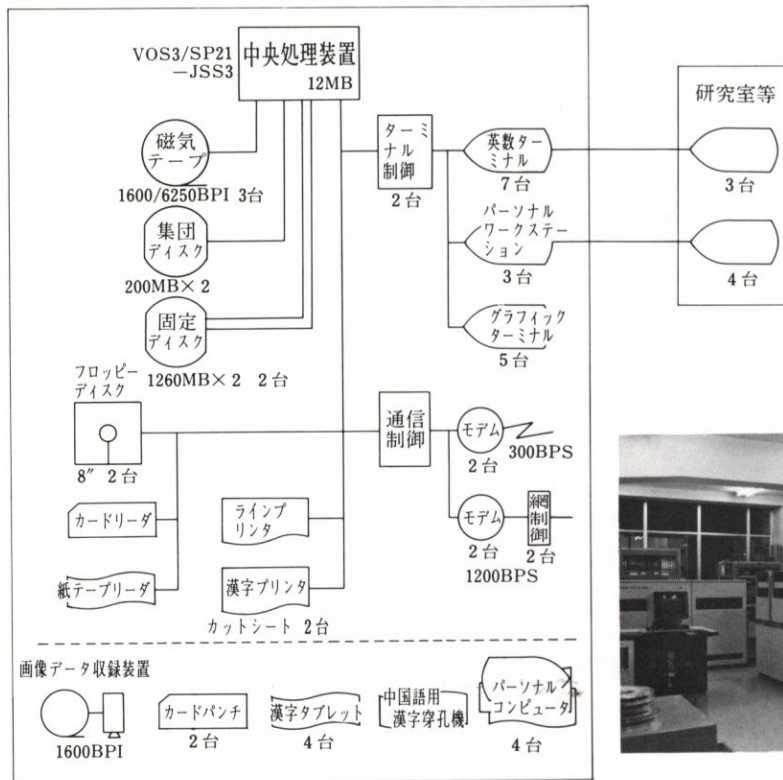
- Gordon T. Bowles : アメリカ・人類学 1967. 10. 6~1968. 9. 15
Muhammad Ahmad Anis : エジプト・近代史 1968. 10. 2~12. 25
Raouf 'Abbās Hāmid : エジプト・近代史 1973. 4. 1~9. 19
Yellava Subbarayalu : インド・南インド中世史 1973. 10. 1~1975. 10. 31
Fe Aldave-Yap : フィリピン・フィリピン国語学 1975. 9. 20~12. 21
金 完 鎮 : 大韓民国・韓国語学 1975. 8. 20~1976. 7. 31
Curtis D. McFarland : アメリカ・言語学
1976. 2. 20~1977. 2. 19, 1979. 10. 1~1980. 9. 30
'Abd al-Rahīm 'Abd al-Rahmān 'Abd al-Rahīm : エジプト・
中東近代経済史, アラビア語学 1976. 6. 6~10. 4
Salim Abdulla Wazir : タンザニア・教育学 1976. 6. 4~10. 11
Bhakti Prasad Mallik : インド・言語学
1976. 7. 13~12. 20, 1985. 9. 30~1986. 9. 29
Karthigesu Indrapala : スリランカ・歴史学 1976. 11. 1~1977. 3. 31
俞 昌 均 : 大韓民国・韓国語学 1977. 4. 1~1978. 1. 31
Søren C. Egerod : デンマーク・東洋言語学, 古典学 1977. 9. 1~1978. 5. 31
Bozkurt Güveng : トルコ・社会人類学
1978. 5. 17~10. 31, 1980. 10. 1~1981. 9. 30
Thubten Jigme Norbu : アメリカ・チベット学 1978. 6. 27~1979. 3. 31
André-Georges Haudricourt : フランス・言語学, 植物学, 民族学
1978. 10. 2~10. 31
Maria Lourdes S. Bautista : フィリピン・言語学 1978. 10. 23~1979. 5. 12
William S-Y. Wang : アメリカ・言語学, 音声学, 神経言語学 1979. 2. 15~7. 14
Alhaji Faruk Gezawa : ナイジェリア・ハウサ語学 1979. 4. 12~12. 17
Shyamsunder Joshi : インド・ヒンディー文学 1979. 5. 26~8. 25
Dor Bahadur Bista : ネパール・社会人類学
1979. 5. 30~6. 20, 1983. 5. 27~1984. 5. 26
Jean-Baptiste Bunkungu : オートボルタ・モシ語学 1979. 6. 1~9. 30
Paul M. Thompson : アメリカ・中国哲学, 中国文学 1979. 9. 16~1980. 9. 15
Chandra Mudaliar : インド・国際関係論, 政治学 1979. 10. 1~1980. 9. 30
Udom Warotamasikkhadit : タイ・言語学 1979. 11. 6~11. 28
Thomas Sebeok : アメリカ・言語学, 記号学 1980. 4. 13~4. 27
傅 懋 勳 : 中国・言語学, 民族学 1980. 6. 11~1981. 3. 10
Samuel H. Elbert : アメリカ・ポリネシア諸語 1980. 10. 1~1981. 1. 31
Kripal C. Yadav : インド・歴史学 1980. 10. 1~1981. 9. 30
Alain Peyraube : フランス・中国言語学 1980. 10. 11~12. 10
徐 在 克 : 大韓民国・韓国語学 1981. 5. 25~1982. 3. 15

- Muhammad B. Mkelle : タンザニア・スワヒリ語学 1981. 6. 19~12. 18
- Maurice Coyaud : フランス・中国言語学 1981. 7. 1~7. 31
- William O. Beeman : アメリカ・人類学 1981. 9. 1~1982. 8. 31
- Marie-Claude Paris : フランス・中国言語学 1981. 9. 12~10. 11
- Talat Tekin : トルコ・古代トルコ語 1981. 9. 14~1982. 1. 11
- P.A. Narasimha Murthy : インド・政治学, 国際関係論 1981. 10. 1~1982. 9. 30
- Yoshiro Imaeda : フランス・チベット学 1981. 10. 1~1982. 1. 16
- Ernesto Constantino : フィリピン・フィリピン言語学 1981. 11. 1~1982. 10. 31
- Suresh Awasthi : インド・民俗演劇 1982. 2. 1. ~1983. 1. 31
- Salah A. El-Araby : エジプト・アラビア語視聴覚教育学 1982. 2. 1~1983. 1. 31
- Kiruja Ruchiami : ケニア・ケニア国大統領府学術研究部主任 1982. 5. 1~5. 31
- Mohammadou Aliou : カメルーン・フラ言語学 1982. 6. 1~9. 10
- John G. Hangin : アメリカ・モンゴル言語学 1982. 9. 1~1983. 8. 31
- Isidore Dyen : アメリカ・オーストロネシア比較言語学 1982. 8. 25~1983. 8. 24
- Suriya Ratanakul : タイ・東南アジア諸言語, 言語学 1982. 8. 28~9. 11
- Tuncer Baykara : トルコ・歴史学 1982. 10. 25~1983. 1. 24
- Kanchana Ngourngsi : タイ・言語学 1982. 12. 10~12. 23
- Elmar A. Hostenstein : スイス・普遍人類学 1983. 3. 1~1984. 2. 29
- 南 豊鉉 : 大韓民国・韓国語学 1983. 8. 11~1984. 8. 10
- Alexis Rygaloff : フランス・中国言語学, 東アジア言語学 1983. 10. 1~1984. 9. 30
- Adel Abdulsalam : シリア・自然地理学, チェルケス語 1983. 10. 21~1984. 10. 20
- Sechin Jagchid : アメリカ・モンゴル史 1983. 9. 1~1984. 8. 31
- Santasilan Kadirgamar : スリランカ・国際関係論 1983. 11. 1~1984. 8. 13
- Lilia F. Antonio : フィリピン・フィリピン, フィリピン翻訳学
1984. 3. 15~1984. 9. 14
- Rajagopalan Venkataratnam : インド・医療社会学 1984. 6. 4~1985. 6. 3
- Dattatreya N. Dhanagare : インド・社会学 1984. 9. 1~12. 31
- 朴 熙泰 : 大韓民国・日本語学 1984. 9. 1~1985. 8. 31
- Ram Adhar Singh : インド・言語学 1984. 10. 1~1985. 9. 30
- Barbara N. Aziz : アメリカ・社会人類学 1984. 10. 16~1985. 10. 15
- Guillermo E. Quartucci : メキシコ・日本文学 1984. 11. 26~1985. 9. 27
- 黄 国営 : 中華人民共和国・言語学 1985. 2. 5~12. 4
- Pradyumna P. Karan : アメリカ・人文地理学 1985. 10. 1~1986. 9. 30
- 馬 真 : 中華人民共和国・中国言語学 1985. 10. 1~1986. 9. 30
- Metin And : トルコ・演劇学 1986. 3. 1~1986. 5. 31
- 韓 美卿 : 大韓民国・日本語学 1986. 4. 1~1987. 1. 31

施設

電 算 機 室

システム構成図



当研究所では、1978年1月から、HITAC M-150システムを導入し、1983年4月からはM-240Dにグレードアップしました。1986年4月に増設を行い、内部メモリーは12MB、ディスク装置は5.4GB、磁気テープは3デッキ、フロッピーディスクは2ドライブになりました。入力にはパンチカード、紙テープ、TSS端末が使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタが2台ありますが、これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されています。

このほかのソフトウェアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままパンチ、入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィック・ディスプレイもあり、AA諸言語の研修の自動化等の開発研究も行われています。

1979年度に導入された画像処理システムは、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に威力を発揮しています。

図 書 室

共同利用研究機関としての当研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究に必要な基礎資料を1964年の創設以来毎年購入しています。また海外研究機関(56ヶ国160機関)との図書交換を通じて研究書・論文集等を収集し、図書室の蔵書総冊数は1986年3月末現在で約50,000冊にのぼっています。

蔵書の中には、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、雑誌(約1,320種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力を入れ、機会あるごとにバックナンバーを購入し、できるだけ完本でそろえるよう努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロフィルム化されているほか、19世紀末に創刊されたベンガル語の主要文芸雑誌5種類のバックナンバーが全部そろっているなど、他の研究機関には見られぬ資料が所蔵されています。

またラングーン大学より寄贈されたビルマ語の文献資料(1,300冊)をはじめ、東アジア・東南アジア・南アジア・西アジア・中近東・アフリカ・西欧・東欧・ソ連邦・太平洋地域におけるそれぞれの現地語で書かれた資料が数多くあり、当研究所図書室の特色の一つとなっています。また研究所の特色あるコレクションとして、次のような文庫があります。

①. 山本文庫(昭和42年受入)

著名な満洲語学者であった故山本謙吾元跡見学園短期大学教授(1920~65)の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献(和書・洋書合計598冊)が含まれる。

②. 浅井文庫(昭和45年受入)

これは、AA研の元運営委員でありかつ著名なオーストロネシア言語学者であった故浅井恵倫博士(1895~1969)の戦後集められたアジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類(和書・洋書合計191冊、文書18葉)を始め、同博士が台湾より持ち帰られた高砂族に関する貴重な言語資料(図書・ノート・写真類・未完未発表の高砂族伝説集総索引カード等)が含まれている。この写真類の中には、世界的に貴重なキリシタン資料「スピリツアル修行(Spiritual Xuguio)」の原本を写した35ミリフィルムが含まれているが、研究者の便宜を考え現在その複製フィルムは国文学研究資料館に置かれてある。「スピリツアル修行」の原本は、長崎とマドリードに1冊ずつ、世界に僅か2冊しか現存しないという稀覯本であるが、戦前には実はもう1冊マニラにあって、俗に「マニラ本」と呼ばれていた。しかしこの「マニラ本」は戦禍により焼失してしまい、浅井博士の撮られた写真を通してしか今はその原形を知り得なくなっている。

③. 小林文庫(昭和51年受入)

著名な蒙古史の研究者である小林高四郎元横浜国立大学教授(1905~)の個人蔵書で、蒙古民族の生活と習俗に関する文献(和書、洋書合計1,671冊)が含まれている。

なお、このほかAA研国語教育資料調査専門委員会の収集になるアジア・アフリカ諸国の教科書約300冊もあります。さらに最近外国人研究者のための日本研究資料(約2,000冊)も積極的に集めだしており、今後海外からの利用数も増えることが予想されます。

なお利用者の便宜のためマイクロリーダーとリーダー・プリンターが備えつけられています。

音声学実験室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが……」

「フラニ語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケータ―をはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。

音の性質・特徴やその調音状態を観察し記録するために、次のような分析機器が用意されています。サウンド・スペクトログラフは、音波を周波数分析して、その各時点ごとの音波の構成要素をとりだして特殊用紙上に濃淡模様で表示してくれます。周波数分析には用途に応じてワイドバンドとナローバンドがあります。ワイドバンドでの濃淡模様は各音の長さと共にそれぞれの様々な音色を示してくれ、ナローバンドでは各音の長さと共に音の高低変化を示してくれます。このような分析を通して未知の表現し難い音声を選んだ規準のもとで表現可能にしたり、またその調音状態を推測する手助けを与えてくれます。ピッチ・エクストラクターは、音の経過時間にしながら各時点での基本周波数や音の強弱の度合を分析し、ブラウン管面上に表示してくれます。またその管面の表示を特殊紙上にコピーすることもできます。管面表示の最大時間長は10秒ですので、単語の分析のみならず小文のイントネーションの分析もできます。さらに長時間にわたる連続音声の記録のためにフォトコーダーがピッチ・エクストラクターと共に用いられています。フォトコーダーは、極めて詳細な音声データの観察のため、音声波を直接表示・記録することにも用いられています。エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を直接に観察し記録するための機器のひとつです。32個の微小な電極を埋めこんだ人口口蓋を発話者の口蓋にはめて、電極と舌との各時点ごとに変化する接触状態を、機械の前面パネルに口蓋状に配列した32個の小ランプの点滅により表示してくれます。また、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、オープンリールテープ・カセットテープを高速にコピーするテープ・デュプリケータ―が、言語研修用テープの作製やフィールド調査などで収集されたテープのコピーのために用意されています。また良好な条件でオリジナルテープを録音するために、防音室や各種のテープレコーダーやマイクロフォンが用意されています。

付属施設の“音声・言語研修資料室”には、フィールド調査で集められた世界のめずらしい言語や貴重な民話・民族音楽などのテープをはじめ、言語研修のテキストやテープ、各種の語学レコード・テープが整理保管され、研究者の利用の便をはかっています。

出版物一覽

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。
なお、*印のものは在庫がありません。

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), *7(1974), *8(1974), *9(1974), *10(1975), *11(1976), *12(1976), *13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), 20(1980), 21(1981), 22(1981), 23(1982), 24(1982), *25(1983), 26(1983), *27(1984), 28(1984), 29(1985), 30(1985), 31(1986).
アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~56. (1966~86).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- *2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- *5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlük Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasulid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. MCFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab: 1920—1947*, 1981.
17. EL-ARABY, Salah A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners-Methods and Media*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux (Burkina-Faso)*, 1985.
19. MIZUSHIMA, T., *Nattar and the Socio-Economic change in South India in the 18th—19th Centuries*, 1986.

アジア・アフリカ基礎語彙集

- | | |
|--|---|
| 1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969. | <i>Languages</i> , 1979. |
| *2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971. | 10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979. |
| *3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972. | 11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980. |
| 4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973. | 12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981. |
| 5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974. | 13. 藪 司郎, アツイ語基礎語彙集, 1981. |
| 6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975. | 14. 中嶋幹起, 浙南呉語基礎語彙集, 1983. |
| 7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976. | 15. 湯川恭敏, サンバー語語彙集, 1984. |
| 8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977. | 16. 梶 茂樹, <i>Lexique Tembo I Tembo-Swahili du Zaïre-Japonais-Français</i> , 1985. |
| 9. 奈良 毅, <i>Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan</i> | |

外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay. Texts and Translation*, 1982.
2. EL-ARABY, Salah A., *Intermediate Egyptian Arabic-An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的内蒙古(一), 1985.
4. 馬真他, 西南官話基本文型の記述, 1986.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), 4(1971), 5(1972), *6(1973), 7(1972), 8・9(1986).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. *1(1972), *2(1972), 3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. *1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984), 14(1986).
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:

No. *11. Korean (梅田博之), 1973. 11z. Ainu (村崎恭子), 1978. *12b. Fukienese (中嶋幹起), 1976. *12z. Tibetan (北村 甫), 1977. 13. Indo-Aryan (石垣幸雄), 1980. 13a. Hindi (溝上富夫), 1980. *13b. Marathi (内藤雅雄), 1976. 13c. Bengali (奈良 毅), 1979. 13d. Khaling (鳥羽季義), 1979, 1984. 13e. Panjabi (溝上富夫), 1981. 13x. Tamil (徳永宗雄), 1981. 13y. Malayalam (伊藤正二), 1978. *14a. Cambodian (坂本恭章), 1974. *14b. Burmese (藪 司郎), 1974. 14c. Thai (森 幹男), 1975, 1984. 15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975, 1983. *16b. Samoan (小田真弘), 1977.	*17. Persian (上岡弘二), 1976. 17b. Baluchi (繩田鉄男), 1981. 17m. Mazandarani (繩田鉄男), 1984. 17p. Parachi (繩田鉄男), 1983. 17s. Shughni (繩田鉄男), 1980. *20. African (石垣幸雄), 1975. *21. Swahili (守野庸雄), 1976. *22a. Cushitic (石垣幸雄), 1972. 22b. Ethiopic (石垣幸雄), 1978. *23. Hausa (松下周二), 1974. *26. Fulfulde (江口一久), 1974. 33. Romance & Greek (石垣幸雄), 1973. 33y. Basque (石垣幸雄), 1979. 33z. Maltese (石垣幸雄), 1977. 34a. Albanian (石垣幸雄), 1979. 36. Uralic etc. (石垣幸雄), 1976. 40. USSR Major (石垣幸雄), 1980.
--	--
8. アフリカ部族社会の比較研究: 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), 2. アフリカ社会の地域性(1973).
- *9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1 (1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1(1975), *2(1975), *3(1976), *4(鄒 嘉彦, 老乞大諺解單字索引, 1976), *5(坂本恭章, カンボジア語小辞典, 1976), *6(1976), *7(1977), *8(1978), *9(1978), *10(1979), *11(1979), *12(YUE, Anne O., *The Teng-Xian Dialect of Chinese*, 1979), *13(1980), *14(藍清漢, 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), *17(傅懋勳, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究(上册), 1981), 18(徐琳・木玉璋, 傣僳族《創世記》研究, 1981), 19(1982), 20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982), 21(1983), *22(1984), 23(傅懋勳, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究(下册), 1984), 24(1985), 25(ポールK. ベネディクト, 突破口: 東南アジアの言語から日本語へ一日の神の民の起源, 1985), 26(1986), 27(徐琳, 白族《黃氏女対経》研究, 1986).
11. *Oceanic Studies*, No. 1 (1976).
- *12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集 *1(1976), *2(1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究: 南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980), 6(1985).

14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK,*1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983).
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語 (1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, Nos. 1 (飯島 茂, 日本からみた “Thailand : A Loosely Structured Social System,” 1981), 2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, Vol. 1 No. 1~2. (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol. 3 No. 1 (*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No. 1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), *No. 2 (AWASTHI, Suresh : *Drama : The Gift of Gods-culture, Performance and Communication in India*, 1983), *No. 3 (NAGASHIMA, Y.S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica-A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica- 1984*).
19. *Nationalism in Asia and Its International Relations*, No. 1 (*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985), No. 2 (アジア政治の展開と国際関係, 1986).
20. 象徴と世界観研究叢書, No. 1(高知尾仁, 球体遊戯, 1986), No. 2(橋本裕之, 春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー, 1986).

African Languages and Ethnography

- *1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- *2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1976.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férôde du Diamaré: Maroua et Pétte*, 1976.
4. EGUCHI, P. K., (tr.), *Shi'r al-Tûba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/ wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulbe du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue-Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIXe Siecle*, 1982.
15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigre*, 1982.
17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foubina*, 1983.
18. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.
19. KAJI, S., *Deux Mille Phrases de Swahili Tel Qu'il Se Parl au Zaïre*, 1985.
20. MOHAMMADOU, E., *Traditions D'Origine des Peuples du Centre et de L'Ouest du Cameroun*, 1986.
21. TOMIKAWA, M., *A Datoga Folklore Vocabulary*, 1986.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., “Kacem Ali” — *Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.

7. MIKI, W., & 'Abd al-Rahim., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.
8. MIKI, W., HONDA G. & M. Salah Ahmed, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告2—, 1979.
10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lārestāni Studies I. Lāri Basic Vocabulary*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn's (D. 1139 A. H. / 1727 A. D.)*, Vol. 1 (Arabic Text), Ed. & Notes, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (1) — Texts in Somali [1] —*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (1) — Texts in Egyptian Arabic [1] —*, 1982.
19. MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt—From the Field Notes on the Coptic Monks' Life —*, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan—Her Şeyi Ile 'Tarihi Yaşatma Denemesi'—*, 1984.
22. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn's*, Vol. 2, *Annotations and Indices*, 1984.
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-Determination Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development—A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDULSALAM, A., *The Rural Geographical Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region—A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDULSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.
26. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (2)*, 1985.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S. (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari Language — A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad — A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies 1*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hisa (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., 1982. *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P. P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Map—The Kingdom of Nepal*, 1983.
12. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M., NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*. II, 1984.
13. KARAN, P. P., PAUER, G., & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya Development in Mountain Environment*, 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language ; A Working Outline*, 1985.
15. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y., HOSHI, M., *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*, 1986, SHARMA, P. R., 三瓶清朝, 山本勇次, ネパールにおける言語・文化・社会の動態, 1986.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Peruvalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的变化容——アパドゥライ村の土地所有関係を中心にして——, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T., & NARA, T., *Socio Economic Studies of Two Villages ; Mahizambadi and Naykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*, 1982.

Socio-cultural Change in Villages in India

1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983.
2. *Modern Period*, No. 1 (HARA, T., Mizushima, T. & NAKAMURA, H.), No. 2 (KOMOGUCHI, Y. & YANAGISAWA, H.), 1983, No. 3 (KOMOGUCHI, Y.), 1984.

Sudan Sahel Studies

1. TOMIKAWA, M. (ed.), 1984.
2. TOMIKAWA, M. (ed), 1986.

Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

1. HARA, T., & UMITSU, M., 1985.
2. FAROUK, A., 1985.
3. TANIGUCHI, S., & SATO, H., 1985.
4. ISLAM, S., 1985.

South Asian Monograph

1. KAWAI, A., '*Landlords' and Imperial Rule : Change in Bengal Agrarian Society C 1885—1940*, Volume 1, 1986.

言語研修テキスト

- *1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊(1974).
- *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).
- *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).
- *4. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1975).

- *5. ビルマ語, 大野 徹ほか編, 全 5 冊(1976).
- *6. ベルシア語, 上岡弘二ほか編, 全 3 冊(1976).
- *7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全 2 冊(1976).
- *8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全 4 冊(1977).
- *9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全 3 冊(1977).
- *10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全 4 冊(1977).
- *11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全 3 冊(1978).
- *12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全 2 冊(1978).
- 13. ベルシア語, 勝藤猛ほか編, 全 3 冊(1978).
- 14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全 3 冊(1979).
- *15. ビルマ語, 藪司郎編, 全 3 冊(1979).
- *16. ネパール語, 石井溥ほか編, 全 3 冊(1980).
- *17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全 2 冊(1980).
- 18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全 4 冊(1980).
- 19. 中国語, 大河内康憲編, 1 冊(1981).
- *20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全 3 冊(1981).
- 21. パシュトー語, 縄田鉄男編, 全 3 冊(1981).
- 22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビー編, 全 2 冊(1982).
- 23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全 2 冊(1982).
- *24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全 3 冊(1983).
- *25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全 3 冊(1983).
- 26. パンジャーブ語, 溝上富夫編, 全 3 冊(1983).
- *27. ピリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編, 全 2 冊(1984).
- 28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全 2 冊(1984).
- 29. トルコ語, 勝田 茂編, 全 3 冊(1984).
- 30. 朝鮮語, 大江孝男編, 全 3 冊(1985).
- 31. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全 4 冊(1985).
- 32. スワヒリ語, 宮本正典ほか編, 全 5 冊(1985).
- 資料 1. スワヒリ語<三日坊主コース>テキスト, 守野庸雄編, 1 冊(1985).

コンピュータ マニュアル シリーズ

- 1. VSAMEDIT (テキストエディター) 松下周二 (1984).
- 2. FONTMAKER (文字フォント作製・修正) 今井健二 (1985).
- 3. BUNPOO (文法: 文字コード変換) 今井健二 (1982).
- 4. AAFE (文字フォントエディタ) 今井健二 (1985).
- 5. AATEDIT (各種言語テキストエディタ) 今井健二 (1985).
- 6. 辞書検索表示プログラム 松下周二 (1985).
- 別冊 1. 文字フォントリスト (1984).
- 別冊 2. 文字フォントリスト 2 (1984).

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料

- *1. HASHIMOTO, M. J., *hP'ags-pa Chinese*, 1978.
- 2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化 (資料集), 1978.
- 3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字 (資料集), 1978.
- 4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集 (I), 1979.
- 5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
- 6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
- 7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集 (II), 1980.

「AA諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語 1, 1978.
- *77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語 1, 1978.
- *77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語 1, 1978.
- *78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語—朝鮮語 2, 1979.
- *78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語—中国語 2, 1979.
- *78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語 1, 1979.
- *78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語 1, 1979.
- *78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語 1, 1979.
- 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集 1: 「の」日本語—AA 諸言語, 1979.
- *79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- *79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語—タイ語 2, 1980.

- *79-5. 奈良 毅：基本動詞対照用例集 日本語—ヒンディー語 2, 1979.
- 79-6. 内記 良一：基本動詞対照用例集 日本語—アラビア語 2, 1980.
- *79-7. 守野 庸雄：基本動詞対照用例集 日本語—スワヒリ語 2, 1980.
- 79-8. 梅田博之ほか：AA 諸言語教育基本語彙表, 1980.

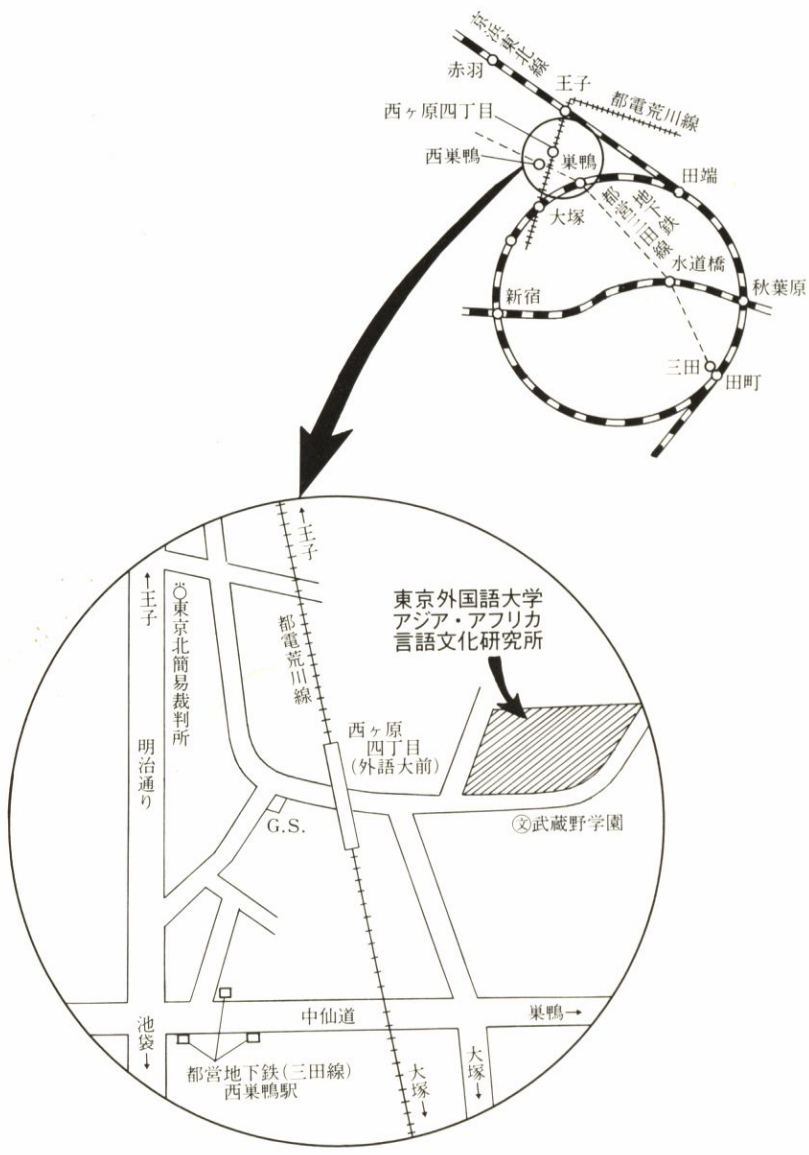
一般研究出版物

湯川 恭敏, サンバー語動詞のアクセント, 1983.

表紙写真説明

灼けつくようなゴビ砂漠の広がりななかを旅し、ようやく、天山山脈の麓の街ウルムチに着いた。冷気が心地よい。シルクロード歴史の旅を試みようとするものは誰もここで休息をとる。ウルムチは新疆ウイグル自治区の首府。街には紫髯緑眼の容貌をもつ人々があふれ、一番耳にするのはウイグル語とカザフ語で、漢族に物をたずねても返ってくるのは、一般に新疆語と呼ばれる不思議な語調の漢語だった。多民族の居住地では相互作用で言語の変化も著しい。写真は天山山麓の放牧地でみたカザフ族の婦人たち。遊牧生活を営むカザフ族は男女共じょうずに馬を乗りこなし、草原を疾駆するそのさまは壮観である。

(中嶋幹起)



アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

東京都北区西ヶ原4丁目51番21号 〒114
TEL 03-917-6111 (代)
国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原四丁目
(外語大前) から徒歩5分
地下鉄・都営三田線西巣鴨下車10分

